



六甲山頂より神戸市街の夜景を眺めたことがある。細かい宝石を無数にちりばめた いわば 地上の銀河のような美しさにしばし心を奪われたものである。ポートアイランド・メリケン波止場・元町の商店街・新神戸駅などの現代の風物を満載した光のベルトは決して恵まれた自然基盤の上に築かれたわけではなかった。北側を急峻な活断層崖にさえぎられ 軟弱な地盤の上に開発された市街地は絶えず六甲山地からの土石流などの災害に悩まされてきた。本文中に多くの頁をさかれている地質構造・活断層・地すべり・トンネル工事・地震などの記載は 自然との調和の中で生活の場を切り開いてきた背景を読者に具体的に示している。

六甲山地の北縁は複雑な断層の集合体である有馬—高槻構造線に限られている。この構造線以南が花崗岩体よりなり構造起伏に富むのと対照的に 北側の帝釈山地は有馬層群の流紋岩体よりなり なたらかで定高性のある地形を呈している。両山地の間の構造谷内には神戸層群が分布している。また 六甲山地は西方へ傾動して低くなり 標高400mあたりから神戸層群に被覆され 更に高塚山撓曲以西では大阪層群に覆われるようになる。

藤田・笠間両氏は長らく芦屋市に住み 六甲山地周辺を自分の庭のように愛し つぶさに観察を行ってきた。

本文中に豊富に盛り込まれた写真・図表には 両氏なればこそその研究の年輪を感じさせるものが多く 記載を奥深いものにしていく。

藤田氏は1960年代に「六甲変動」を提唱した。これは日本のネオテクトニクス研究における中心的思想として定着した感がある。この考えをはぐくんだ舞台が当地域更に既刊の「大阪西北部」 続刊の「須磨」地域である。これらに示された個々の露頭の観察の積み重ねが広くは日本列島の新期地殻運動を説明しうる思想体系に発展しているのである。「私の研究は六甲に発して六甲に帰ってきた」と言う氏のスケールの大きい柔軟

な思考が随所に見られ 研究の楽しさをも実感として味わしてくれる。

本稿脱稿後 笠間氏が急逝された。温厚・誠実で多くの人々に慕われた氏のお人柄が本稿内で少しでも多く味わえることを願って御冥福を祈りたい。

5万分の1地質図幅の新刊

神戸 KŌBE

5万分の1地質図幅
地域地質研究報告

著 者 藤田 和夫・笠間太郎
 発 行 工業技術院 地質調査所
 取 扱 先 東京地学協会 (03)261-0809 262-1401
 そのほか全国主要書店
 販売価格 2,980円

地質ニュース	第347号	7月号
昭和58年7月1日	定価 ¥540	千実費
編 集	発 行	
発行人	工業技術院地質調査所	
発行所	林 久 雄	
	株式会社 実業公報社	
	東京都千代田区九段南4の2の12	
	Tel. (03) 265-0951 (代表)	
	振替口座 東京 1-32466	
総発売元	株式会社 実業公報社	
	出版事業部	